『伝藤原為家筆源氏物語常夏（模写）』解題並びに翻刻・影印

中葉　芳子

今年度、実践女子大学文芸資料研究所の所蔵に帰した、『伝藤原為家筆源氏物語常夏（模写）』は、書写奥書により、弘化三年（一八四六）六月に模写されたものであることがわかる。江戸時代最末期に模写されたものではあるが、その親本は「伝藤原為家筆大四半切源氏物語」として伝存している古筆切のツレだと考えられる。伝藤原為家筆大四半切は、常夏巻の断簡が現時点で知られておらず、当該模写本との比較はできないが、原本が今なお秘蔵されている可能性も残っていよう。

もちろん、親本とされた原本が現存しており公開されることが望ましいが、現時点では紹介されていない。当該模写本は親本に忠実に模写されたことがうかがわれるため、原本が見いだされるまでの研究資料として有用だと考え、翻刻・影印を示し、解題を付して紹介することとした。当該模写本が親本を忠実に模写していることがうかがわれる、と判断した理由については、以下、書誌事項の紹介や内容の考察の際に詳しく述べることとする。

まず、書誌を掲げる。該本は、折本一帖。表紙は縦二九・五センチ、横七・五センチ。表紙・裏表紙とも見返しには、金砂子が粗く撒かれている。外題は打付書で「源氏物語　常夏　二條□□□□」と記すが、損傷が激しく下半分の文字は読めない。内題はない。本文は二十五枚の料紙を継いでいる。各紙の右上に、何紙目に相当するか、を示す漢数字が記されている。これらの漢数字は紙継ぎで下になり、また紙継ぎ後に化粧裁ちされたため、上部が切られて完存していないものが多い。模写が完成してから料紙を継いでいることから、順序を誤らないために番号が付されたのであろう。模写後に料紙を継いだことは、例えば、第四紙と第五紙の継ぎ目を見るとわかる。第四紙最終行（八十三行目）「しほうの人にて」の「人」は、一画目が継ぎ目で止まっている。また第五紙第一行（八十四行目）「なを〳〵の「〳〵」の上部も継ぎ目の下に入っている。

一紙の大きさ（横の長さ）は、第二紙から第二十四紙は約四十三センチ、第一紙が四一・七センチ、第二十五紙が二七・二センチで、全長は約一〇五五センチとなる。本文は五一〇行（第一紙二十行、第二紙～第二十四紙が各二十一行、第二十五紙が七行）、書写奥書が三行、第一紙紙背に二行の裏書がある。折本に仕立てられているためか、折目に料紙の損傷があり、割れて読み取りにくくなっている箇所がある。

書写奥書には、

右二条為家卿真蹟源氏常夏巻一帖
末(弘)化三年丙午六月晦日模之畢
第一本　（花押）

と記され、先にも述べたように弘化三年（一八四六）六月末に模写されたことがわかる。書写奥書の三行目に「第一本」とあるのは、該本の親本を含め、何巻かの書籍をまとめて借り出して来たからであろうか。何らかの一巻目であった

ことを記しておいたのであろうか。

本文は、常夏巻がすべて書写されている。ただし、二六五～二七五行目と、二七六～二八六行目とは順序が逆になっている。この順序が逆になっている二十二行は、影印からわかるように、第十三紙の十四行目から第十四紙の十四行目であり、該本の料紙の綴じ誤りによるものではないことが明らかである。親本の段階で生じた誤りであろう。

では、親本はどのような形態であったのか。巻物だと考えると、十一行分では横の長さとして短いであろう。十一行というのは、冊子本の一面分として適当であるが、冊子本そのものでは十一行と十一行のみ順序が入れ替わるというのは考えにくい。巻子本に改装している、もと冊子本であれば、該本のような誤りも起こりうるであろう。

よって、親本は一面十一行詰の冊子本を巻子本に改装したもので、改装する際に順序を誤って継いでしまったものと考えられる。順序が逆になる前の二六四行は、一面十一行詰の冊子本だと考えると、二四面分、すなわち一二丁分に相当する。一三丁表裏がこの二六五～二八六行目である。本文の五一〇行は、一面十一行詰の冊子本で考えると、四六面（二三丁）分＋四行となり、墨付二四丁の冊子本が親本の本来の形であったことがわかる。

一面十一行詰で藤原為家を伝称筆者とする『源氏物語』と言えば、先に述べたように「伝藤原為家筆大四半切源氏物語」として伝存しているものが思い浮かぶ。この伝藤原為家筆大四半切は、かなりの枚数が伝存し、巻も多岐にわたる。また、巻子本に改装されて一巻すべてが現存している巻もある。本文は河内本系統で、尾州家本との近さが指摘されている。

該本の本文と尾州家本とを比較してみると、表記の違いを除くと、ほぼ一致する。該本には補入・ミセケチも見られるが、訂正後の本文が尾州家本と一致する。二十三行目「せけしの事も」（独自異文）、二六一行目「もてないたまふ

らん」（御物本、富田仙助蔵本、鳳来寺本に一致）、四六〇行「いとかろかなりや」（御物本に一致）が尾州家本と異なる。ただ、二十三行目「おきなひたる心地してせけしの事も」とある「せけし」の「し」は、諸本ともに「ん」とする。「せけし」では意味をなさないが、該本には「し」としか読めない字が書かれている。ただ、下の「の」との間に不自然な空白もある。親本に虫喰いや損傷があったために、「し」のような縦線しか残っていなかったのを、該本が忠実に模写したのではないだろうか。

なお、一行目「ひんかしの□□とのに」、十一行目「風はいと□くふけと」、二十二行目「なにと□□」、四九五行目「と□□、御ふみと」、四九六行目「しるし□□」の□はすべて空白であり、書写した字を擦り消した跡は見られない。もとから何も書かれていないのである。十一行目は一丁オモテの最終行で、手擦れによる損傷が生じやすい位置である。また、一行目・二十二行目、四九五・四九六行目は、それぞれ紙の表裏に当たり、親本に虫喰いがあり文字が読めなかった可能性が高い。一行目と二十二行目に見える□が虫喰いの跡だとすると、それが二十三行目「せけし」の「し」にまで及んでいたことも考えられる。

本文には、先に述べたように、補入・ミセケチが見られる。その中には、一、二文字の訂正・補入だけではなく、数文字もしくは一行分と思われる補入・ミセケチも見られる。二四一行目には「やまかつのこむかへいて、ものめかしたつれ」と一行分の補入が見られるし、二六四行目には「なをひめきみの」という本来の次の行に書かれていたものを目移りで誤写したものの訂正と思われるミセケチもある（二六四行目の次は、親本が正しく紙を継いでいれば二七六行目である）。

一、二文字の訂正・補入に関しては、模写の際の誤写を訂正したものなのか、親本のものを引き継いでいるのか、判断がつかない。しかし、二四一、二六四行目の補入・ミセケチに関しては、親本が該本同様、補入・ミセケチして

いたと判断できる。

なぜなら、二六四行目の目移りによる誤写は、二七六行目が正しい位置になければ生じないはずである。それなのに二六四行目は、二七六行目にある「給ても」の「も」の目移りで「なをひめきみの」と書き、誤りに気付いて訂正していることになる。該本では起こりようのないミセケチ訂正がなされていることから、該本は親本をミセケチまでも忠実に模写したと考えられるのである。

また、二六五～二七五行目と二七六～二八六行目の順序が逆になるためには、先に述べたように、それぞれが一面に書写されていなければ起こらない。二四一行目に補入されている一行分が、親本において、補入ではなく本行に書かれていた場合、一面の行数が合わなくなる。先にも述べたように、二六四行目までは一面十一行で計算して、正しく十二丁分に相当する。このことからも、該本は親本にある補入を忠実に模写したと考えられる証拠となろう。

このような文字数の多い、補入・ミセケチが親本のものを忠実に模写しているのであれば、一、二文字の補入・訂正も親本のものを引き継いでいる可能性があるのではないか。親本が紹介されなければ解決はしないが、可能性として提示しておきたい。

最後に、第一紙紙背にある裏書について触れておく。裏書には、

校異源氏物語によるに冨田仙助氏蔵伝為家本とも
相違ありて同書とは同一本にあらざることしらる

と記される。「校異源氏物語」という語が見られることから、『校異源氏物語』が出版された昭和十七年（一九四二）十月以降に記されたものであることは明らかである。『校異源氏物語』を改訂した『源氏物語大成』が出版された昭和二十八年（一九三四）とこの裏書が記された前後関係は不明であるが、終戦前後に該本を所蔵していた人物による覚書である

と推定される。

以上のように、『伝藤原為家筆源氏物語常夏（模写）』は、現在「伝藤原為家筆大四半切源氏物語」として知られるものを親本として書写された模写本である。親本のミセケチ・補入・損傷さえも忠実に模写しており、親本の存在が知られていない今、河内本系統の尾州家本と深い関係を持つ該本は、本文研究に有用な資料であると考えられる。

翻刻・影印

【凡例】

一　実践女子大学文芸資料研究所蔵『伝藤原為家筆源氏物語常夏（模写）』の翻刻・影印である。

一　ミセケチは、二重抹消線をもって記し、重ね書きは下の文字を二重抹消線を付して記し、重ね書きした文字は右に傍記した。補入記号は「。」で示した。

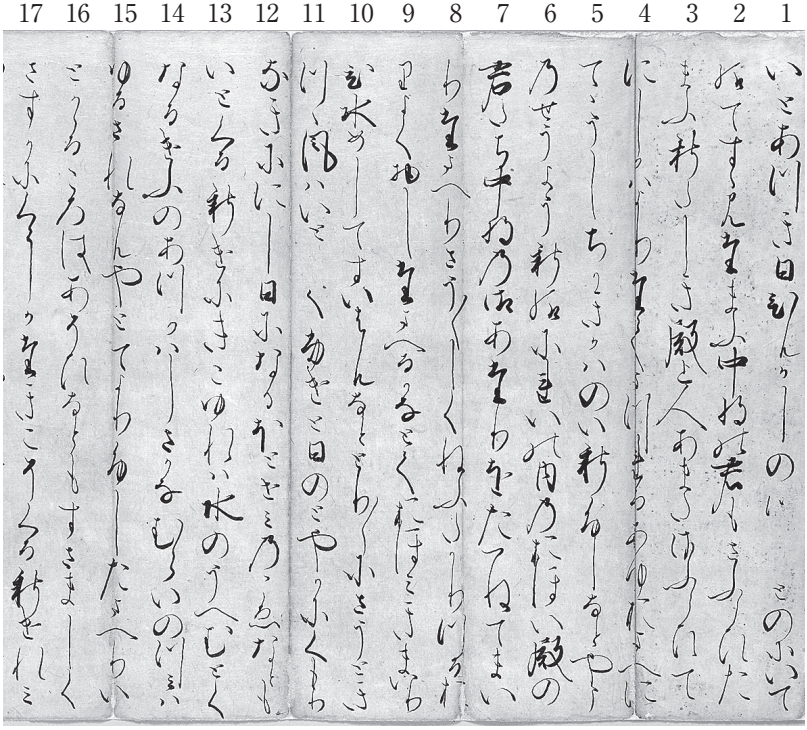
一　漢字は原則として通行の字体を用いた。空白部分は□記号で示した。

【表紙】

源氏物語　常夏　二条 以下、傷みにより不明

【本文】

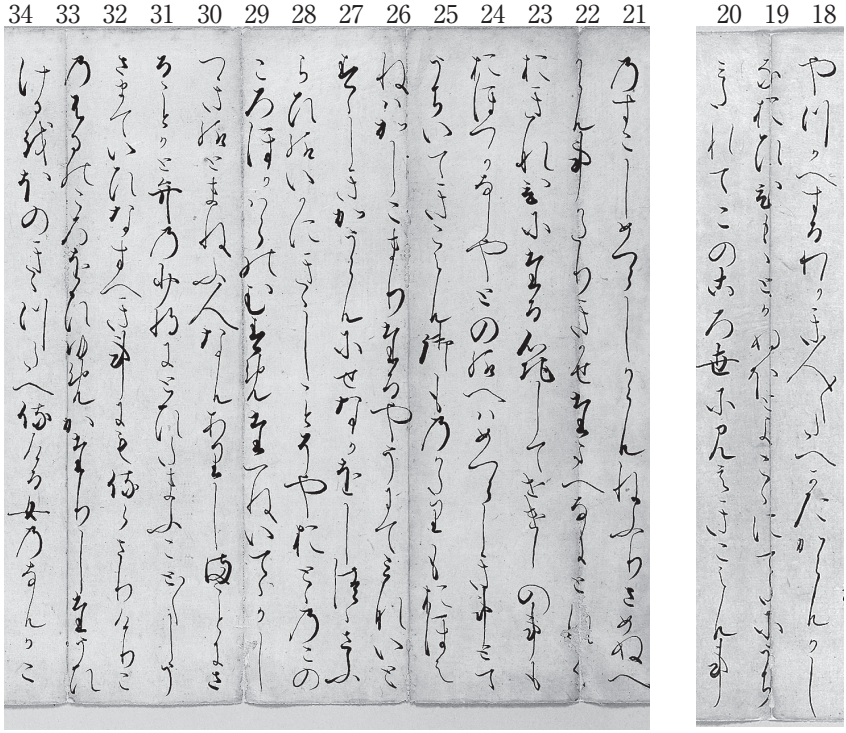
1 いとあつき日ひんかしの□□とのにいて
2 給てすゝみたまふ中将の君もさふらひた
3 まふしたしき殿上人あまたさふらひて
4 にしかはよりたてまつれるあゆおまへに
5 てゝうしちかきかはのいしふしなとやう
6 のせうようし給にれいの内のおほい殿の
7 君たち中将の御あたりをたつねてまい
8 りたまへりさう〳〵しくねふたかりつるお
9 りよく物したまへるかなとておほみきまいり
10 ひ水めしてすいはんなととり〳〵にさうとき
11 つゝ風はいと□くふけと日のとやかにくもり
12 なきににし日になるほとせみのこゑなとも
13 いとくるしけにきこゆれは水のうへむとく
14 なるけふのあつかはしさかなむらいのつみは
15 ゆるされなんやとてよりふしたまへりい
16 とかゝるころはあそひなともすさましく
17 さすかにくらしかたきこそくるしけれみ



18 やつかへするわかき人〳〵たへかたからんかし
19 なおひひも、とかぬほとよこ、にてたにうち
20 みたれてこのころ世に見えきこえん事

」第一紙

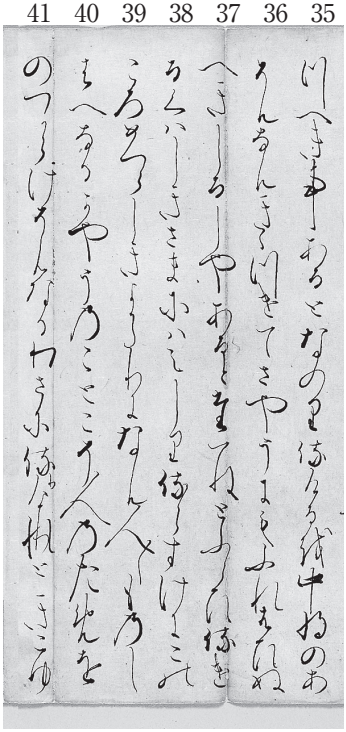
21 のすこしめつらしからんねふりさめぬへ
22 からん事かたりきかせたまへなにと□□
23 おきなひにたる心地してせけしの事も
24 おほつかなしやとの給へはめつらしき事とて
25 うちいてきこえん御ものかたりもおほえ
26 ねはかしこまりたるやうにてみないと
27 す、しきかうらんにせなかをしつ、さふ
28 らひ給いかにき、しことそやおと、のこの
29 ころほかはらのむすめたつねいて、かし
30 つき給とまねふ人なんありしまことにさ
31 ることかと弁の少将にとひたまふこと〳〵しう
32 さまていひなすへき事にも侍らさりけりこ
33 のはるのころをひゆめかたりしたうひ
34 けるをほのき、つたへ侍ける女のなんかこ

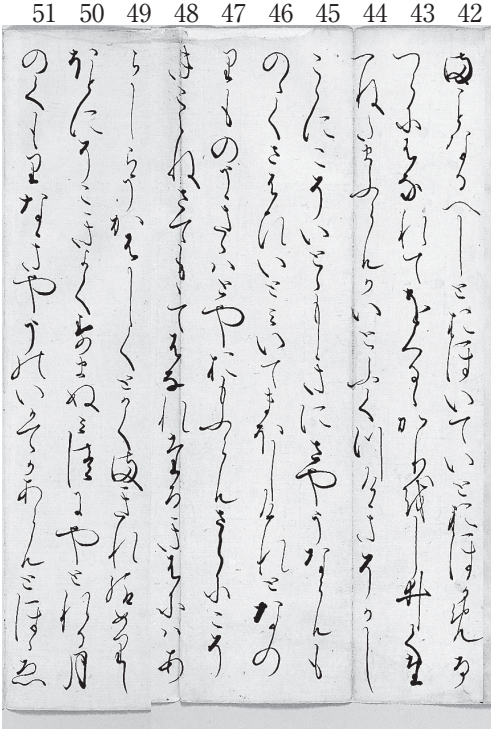


35 つへき事あるとなのり侍けるを中将のあ
36 そんなんきゝつけてさやうにもふれはひぬ
37 へきしるしやあるとたつねとふらひ侍け
38 るくはしきさまにはえしり侍らすけにこの
39 ころめつらしきよかたりになん人〳〵ものし
40 はへなるかやうのことこそ人のためを
41 のつからけそんなるわさに侍けりときこゆ

「第二紙」

42 まことなるへしとおほいていとおほかめる
43 つらにはなれてをくるゝかりをしゐてた
44 つねたまふらんかいとふくつけきそかし
45 こゝにこそいとゝもしきにさやうならんも
46 のゝくさはひいとみいてまほしけれとなの
47 りものうきゝはとやおもふらんさらにこそ
48 きこえねさてもゝてはなれたるきはにはあ
49 らしらうかはしくとかくまきれ給めりし
50 ほとにそこきよくすまぬみつにやとれる月
51 のくもりなきやうのいかてかあらんとほゝゑ

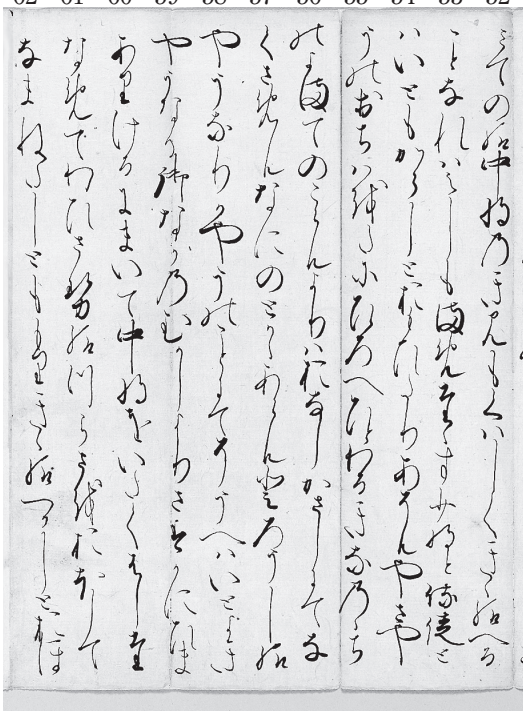


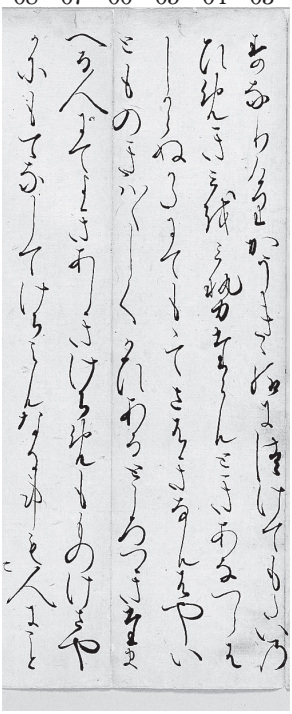


52 みての給中将のきみもくはしくきゝ給へる
53 ことなれはえしもまめたゝす少将と侍従と
54 はいともからしとおもひたりあそんやさや
55 うのおちはをたにひろへひとわるきなのゝち
56 のよまてのこらんよりはおなしかさしにてな
57 くさめんなにのとかゝあらんとろうし給
58 やうなりかやうのことにてそうへはいとよき
59 やうなる御なかのむかしよりさすかにひま
60 ありけるにまいて中将をいたくはした
61 なめてわひさせ給つらさをおほして
62 なまねたしとももりきゝ給へかしとおほ

」第三紙

63 すなりけりかうきゝ給につけてもたいの
64 ひめきみをみせたらんときあなつらは
65 しからぬかたにてもゝてさはきなんはやい
66 とものきはくしくかひあるところつきたま
67 へる人にてよきあしきけちめもものけさや
68 かにもてなしてけちえんなる事も人にこと

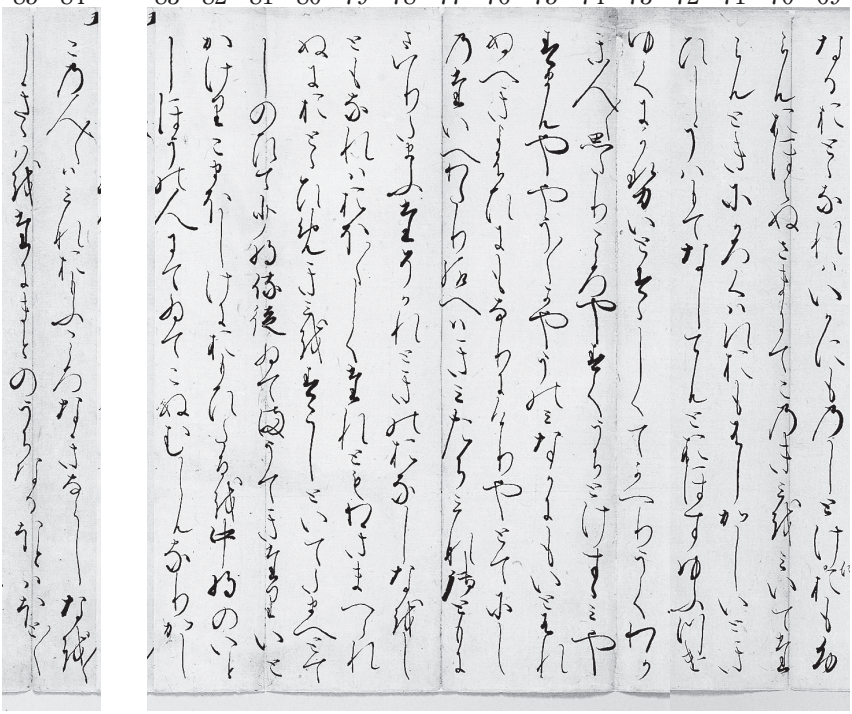




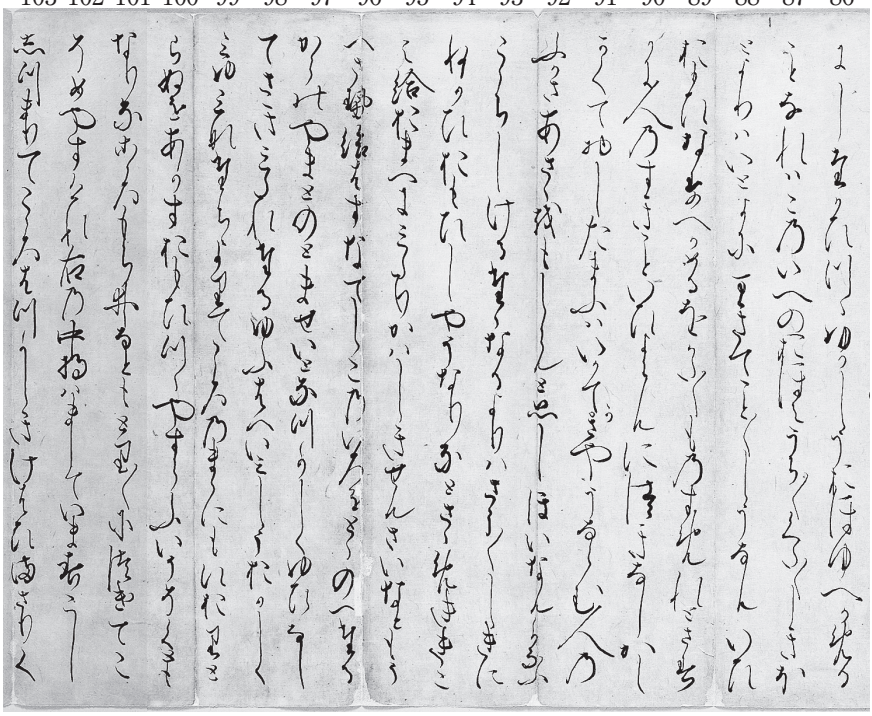
69 なるおとゝなれはいかにものしとけ。おもふ
70 らんおほえぬさまにてこのきみをみいてた
71 らんときにかろくはえおもはしかしいとき
72 ひしうはもてなしてんとおほすゆふつけ
73 ゆくにかせいとすゝしくてかへりうくわか
74 き人〳〵思たりこゝろやすくうちとけすゝみや
75 すまんややう〳〵かやうのみなかにもいとはれ
76 ぬへきよはひにもなりにけりやとてにし
77 のたいへわたり給へはきみたちみな御ともに
78 まいりたまふたそかれときのおなしなをし
79 ともなれはおほ〳〵しくたれともわきまへられ
80 ぬにおとゝひめきみをすこしといてたまへとて
81 しのひて少将侍従ゐてまうてきたりいと
82 かけりこまほしけにおもひたるを中将のいと
83 しほうの人にてゐてこぬむしんなりかし

「第四紙」

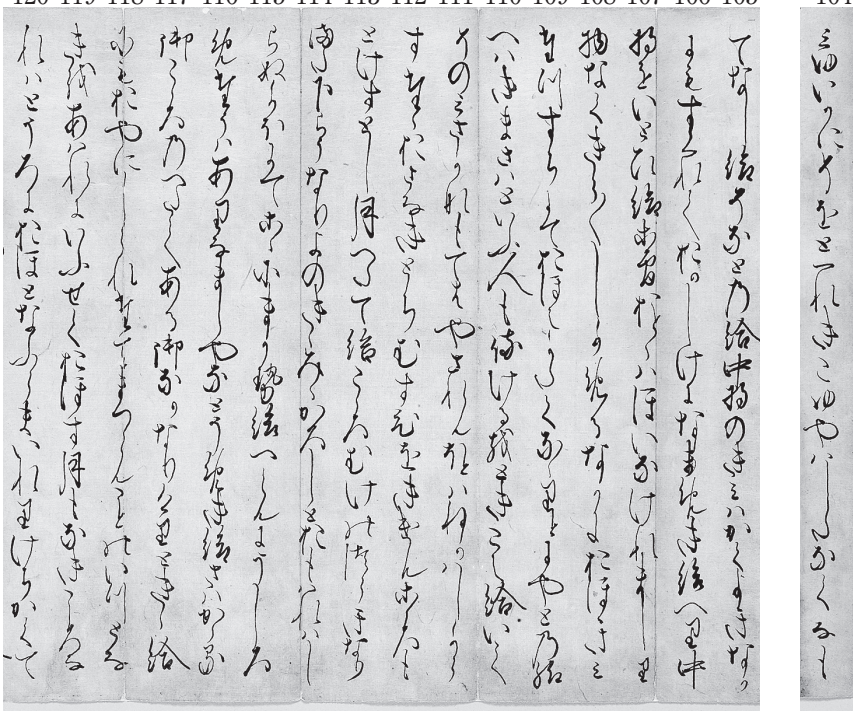
84 この人〳〵はみなおもふこゝろなきならしなを〳〵
85 しきゝはをたにまとのうちなるほとはほと〳〵



86 にしたかひつゝゆかしうおほゆへかめる
87 ことなれはこのいへのおほえうち〳〵くた〳〵しきほ
88 とよりはいとよにすきてこと〳〵しうなんいひ
89 おもひなすへかめるをかた〳〵ものすめれとさす
90 かに人のすきこといひよらんにつきなしかし
91 かくて物したまふはいかて。さやうならむ人の
92 ふかさあさゝをもしらんと思しほいなんかなふ
93 こゝちしけるたゝなるよりはさう〳〵しきに
94 ねかひおもひしやうなりなとさゝめききこ
95 え給おまへにみたりかはしきせんさいなともう
96 へさせ給はすなてしこのいろをとゝのへたる
97 からのやまとのとませいとなつかしくゆひなし
98 てさきみたれたるゆふはへいみしうおかしく
99 みゆみなたちよりてこゝろのまゝにもえおりと
100 らぬをあかすおもひつゝやすらふいうそくとも
101 なりなこゝろもちゐなともとり〳〵につけてこ
102 そめやすけれ右の中将はましていますこし
103 しつまりてこゝろはつかしきけはひまさりて



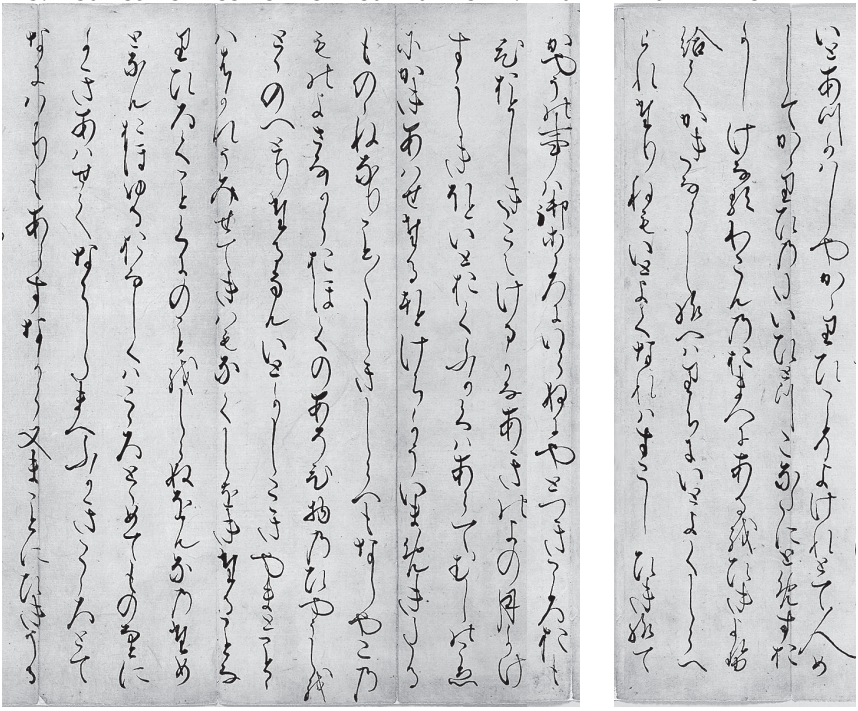
104 みゆいかにそをとつれきこゆやはしたなくなも
」第五紙
105 てなし給そなとの給中将のきみはかくよきなか
106 にもすくれておかしけになまめき給へり中
107 将をいとひ給こそおとゝはほいなけれましり
108 物なくきら〳〵しかめるなかにおほきみ
109 たつすちにておほえかたくなゝりとにやとの給
110 へはきまさはといふ人も侍けるをときこえ給いて
111 そのみさかなもてはやされんほとはねかはしから
112 すたゝおさなきとちむすひをきけんこゝろも
113 とけすとし月へたて給こゝろむけのつらきなり
114 また下らうなりよのきゝみゝかろしとおもはれはし
115 らぬかほにてこゝにまかせ給つらんにうしろ
116 めたうはありなましやなとうめき給さはかゝる
117 御こゝろのへたてある御なかなりけりときゝ給
118 にもおやにしられたてまつらんことのいつとな
119 きをあはれにいふせくおほす月もなきころな
120 れはとうろにおほとなふらまいれりけちかくて



121 いとあつかはしやかゝりひこそよけれとて人め
122 してかゝりひのたいひとつこなたにとめすお
123 かしけなるわこんのおまへにあるをひきよせ
124 給てかきならし給へはりちにいとよくしらへ
125 られたりねもいとよくなれはすこしひき給て

」第六紙

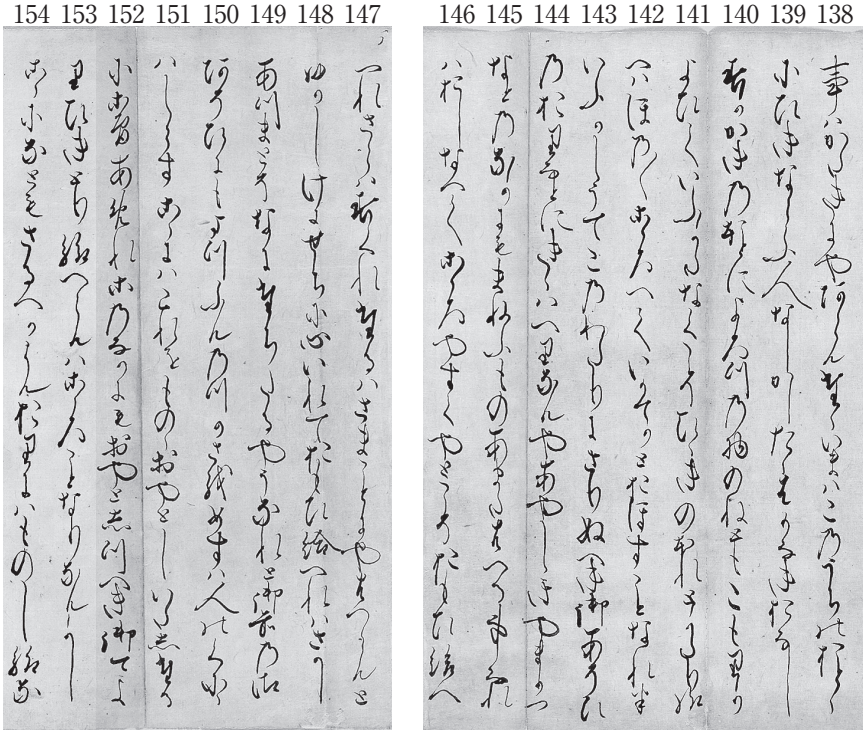
126 かやうの事は御こゝろにいらぬにやとつきころおも
127 ひおとしきこえけるかなあきのよの月かけ
128 すゝしきほといとおくふかくはあらてむしのこゑ
129 にかきあはせたるほとけちかういまめきたる
130 ものゝねなりこと〳〵しきしらへもなしやこの
131 ものよさなからおほくのあそひ物のひやうしを
132 とゝのへとりたるなんいとかしこきやまとこと、
133 ははかなうみせてきはもなくしをきたることな
134 りひろくことくにのことをしらぬをんなのため
135 となんおほゆるおなしくはこゝろとゝめてものなとに
136 かきあはせてならしたまへふかきこゝろとて
137 なにはかりもあらすなから又まことにひきうる



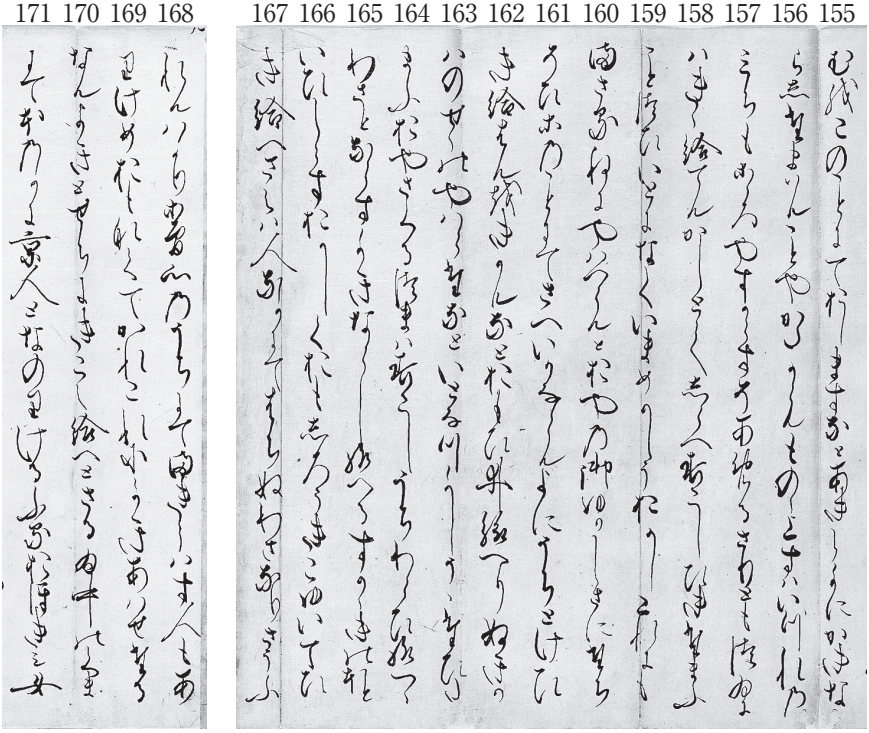
138 事はかたきにやあらんたゝいまはこのうちのおとゝ
139 にひきならふ人なしかしたゝはかなきおなし
140 すかかきのほとによろつの物のねともこもりか
141 よひていふかたなくこそひゝきのほれとかたり給
142 へはほの〳〵こゝろへていかてかとおほすことなれは
143 いふかしうてこのわたりにさりぬへき御あそひ
144 のおりなとにきゝはへりなんやあやしきやまかつ
145 なとのなかにもまねふものあまたはへる事なれ
146 はおしなへてこゝろやすくやとこそおもひ給へ

」第七紙

147 つれさらはすくれたるはさまことにやはへらんと
148 ゆかしけにせちに心いれておもひ給へれはさかし
149 あつまとそなにたちたるやうなれと御前の御
150 あそひにもまつふんのつかさをめすは人のくに、
151 はしらすこゝにはこれをものゝおやとしいたしたる
152 にこそあめれこのなかにもおやとしつへき御てよ
153 りひきとり給へらんはこゝろことなりなんかし
154 こゝになともさるへからんおりにはものし給な

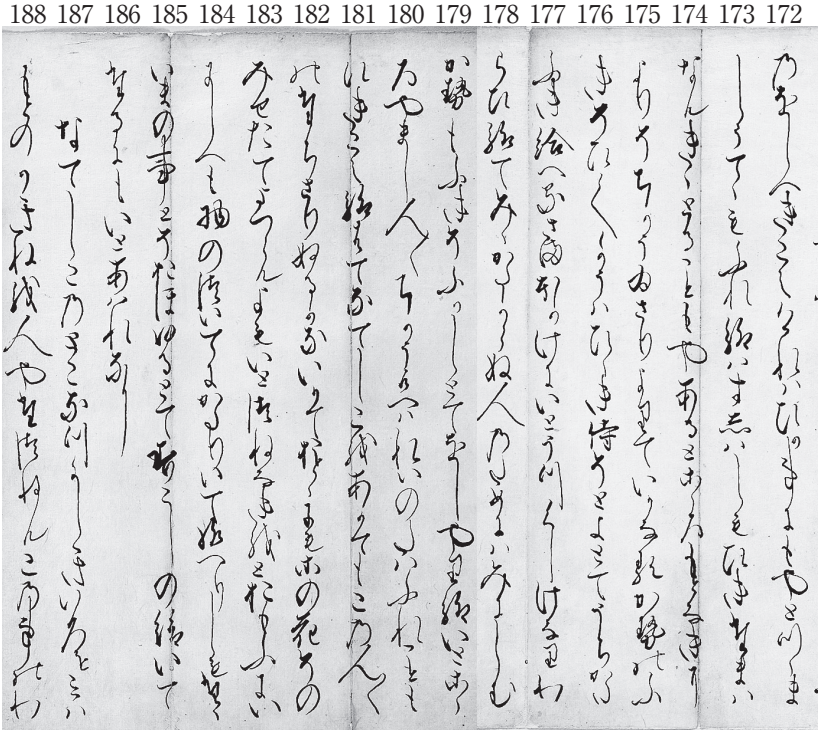


155 むをこのことにておしますなとあきらかにかきな
156 らしたまはんことやかたからんもの、上すはいつれの
157 みちもこゝろやすからすそあめるさりともつゐに
158 はき、給てんかしとてしらへすこしひきたまふ
159 ことつひいとになくいまめかしうおかしこれにも
160 まさるねにやはへらんとおやの御ゆかしさにたち
161 そひこのことにてさへいかならんよにうちとけひ
162 き給はんをきかんなとおもひゐ給へりぬきか
163 はのせ、のやはらたなといとなつかしう、たひた
164 まふおやさくるつまはすこしうちわらひ給つ、
165 わさとならすかきならし給へるすか、きのほと
166 いひしらすおかしくおもしろうきこゆいてひ
167 き給へさえは人なかにてはちぬわさなりさうふ
「第八紙」
168 れんはかりこそ心のうちにてまきらはす人もあ
169 りけめおもなくてかれこれにかきあはせたる
170 なんよきとせちにきこえ給へとさるゐ中のくま
171 にてほのかに京人となのりけるふるおほきみ女

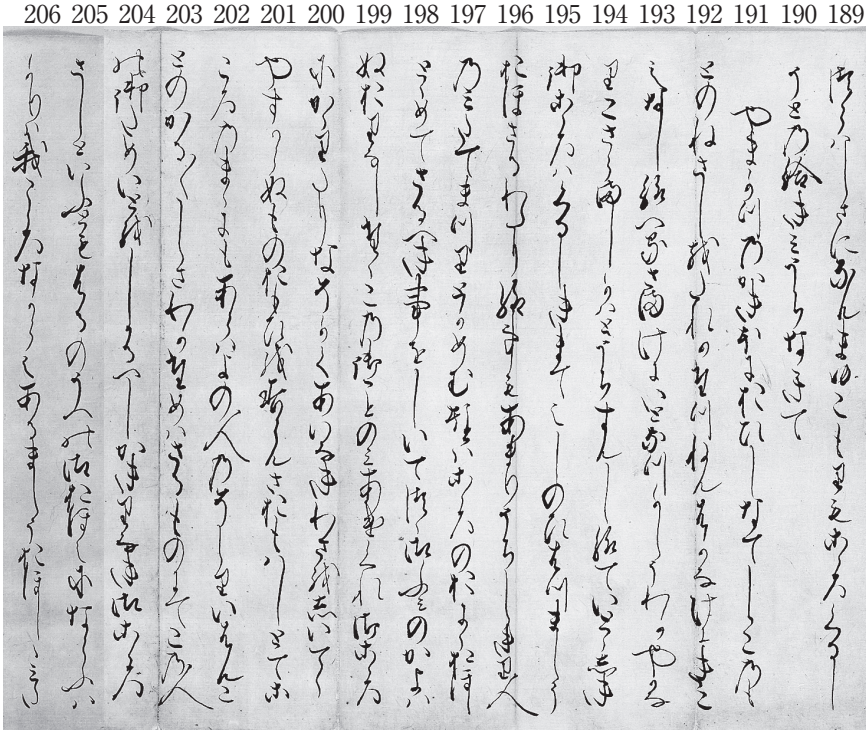


172 のをしへきこえければひ事にもやとつゝま
173 しうてゝもふれ給はすしはしもひきたまは
174 なんきゝとることもやあるとこゝろもとなきに
175 よりそちかうゐさりよりていかなるかせのふ
176 きそひてかうはひゝき侍そとよとてうちかた
177 ふき給へるさまほかけにいとうつくしけなりわ
178 らひ給てみゝかたからぬ人のためにはみにしむ
179 かせもふきそふかしとてをしやり給いとこゝ
180 ろやまし人〳〵ちかう候へはれいのたはふれことも
181 えきこえ給はてなてしこをあかてもこの人〳〵
182 のたちさりぬるかないかておとゝにもこの花その
183 みせたてまつらんよもいとつねなきをとおもふにい
184 にしへも物のついてにかたりいて給へりしもたゝ
185 いまの事とそおほゆるとてすこしの給いて
186 たるにもいとあはれなり
187 なてしこのとこなつかしきいろをみは
188 もとのかきねを人やたつねんこの事のわ

」第九紙



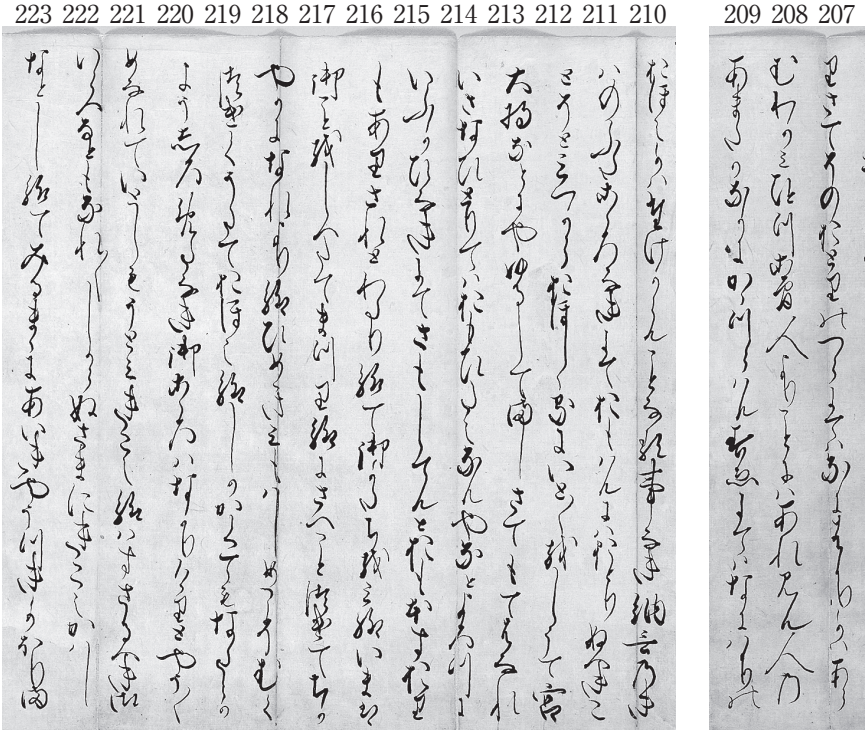
189 つらはしさになんまゆこもりもこゝろくるし
190 うとの給きみうちなきて
191 やまかつのかきほにおひしなてしこのも
192 とのねさしをたれかたつねんはかなけにきこ
193 えなし給へるさまけにいとなつかしうわかやかな
194 りこさらましかはとうちすんし給ていとゝしき
195 御こゝろはくるしきまてえしのひはつましう
196 おほさるわたり給事もあまりうちしきり人
197 のみたてまつりとかめむほとはこゝろのおにゝおほし
198 とゝめてさるへき事をしいてつゝ御ふみのかよは
199 ぬおりなしたゝこの御ことのみあけくれ御こゝろ
200 にかゝりたりなそかくあいなきわさをしいて、
201 やすからぬものおもひをすらんさおもはしとてこ
202 ころのまゝにもあらはよの人のそしりいはんこ
203 とのかるくしさわかためはさるものにてこの人
204 の御ためいとをしかるへしかきりなき御こゝろ
205 さしといふともはるのうへの御おほえにならふは
206 かりは我こゝろなからえあるましうおほしゝみた



207 りさてそのおとりのつらにてはなにはかりかはあら
208 むわかみひとつこそ人よりことにはあれ見人の
209 あまたかなかにかゝらはんすゑにてはなにはかりの

」第十紙

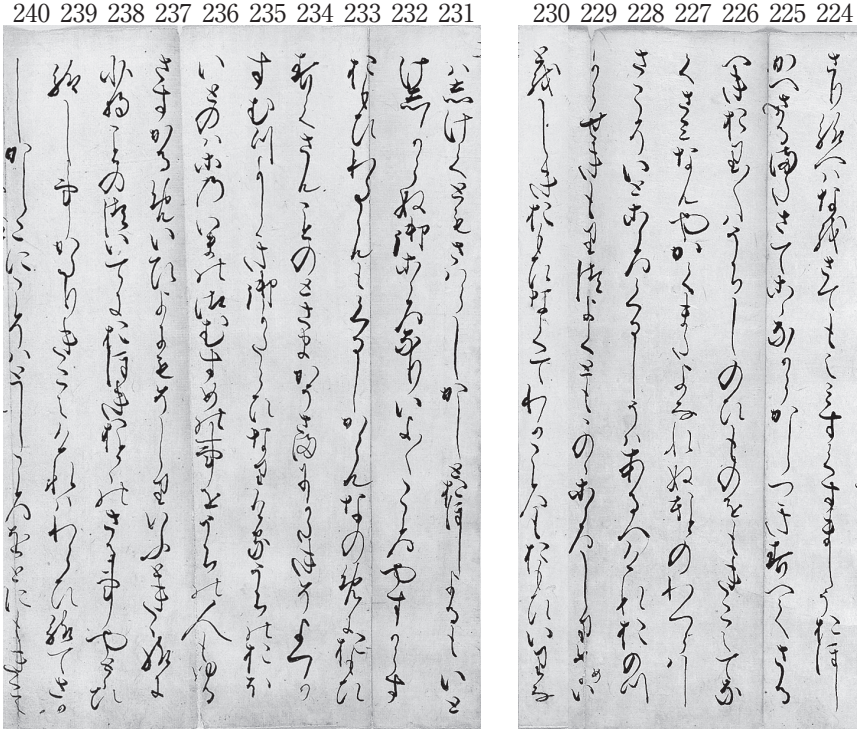
210 おほえかはたけからんことなる事なき納言のき
211 はのふたこゝろなきにておもはんにはおとりぬへきこ
212 とそとみつからおほしゝるにいと〳〵をしうて宮
213 大将なとにやゆるしてましさてもてはなれ
214 いさなひとりてはおもひたえなんやなとよろつに
215 いふかひなきにてさもしてんとおもほすおり
216 もありされとわたり給て御かたちをみ給いまは
217 御ことをしへたてまつり給にさへことつけてちか
218 やかになれより給ひめきみもはしめこそむく
219 つけくうたておほえ給しかかくてもなたらか
220 にうしろめたなき御こゝろはなかりけりとやう〳〵
221 めなれていとしもうとみきこえ給はすさるへき御
222 いらへなともなれ〳〵しからぬさまにきこえかはし
223 なとし給てみるまゝにあいきやうつきかほりま



224 さり給へはなをさてもえみすくすましうおほし
225 かへさるまたさてこゝなからかしつきすへてさる
226 へきおり〳〵はうちしのひものをもきこえてな
227 くさみなんやかくまたよなれぬほとのわつらはし
228 さこそいとこゝろくるしうはあるへけれおのつ
229 からせきもりつよくとも、のゝこゝろしりそ。い
230 とをしきおもひなくてわかこゝろもおもひいりな

」第十一紙

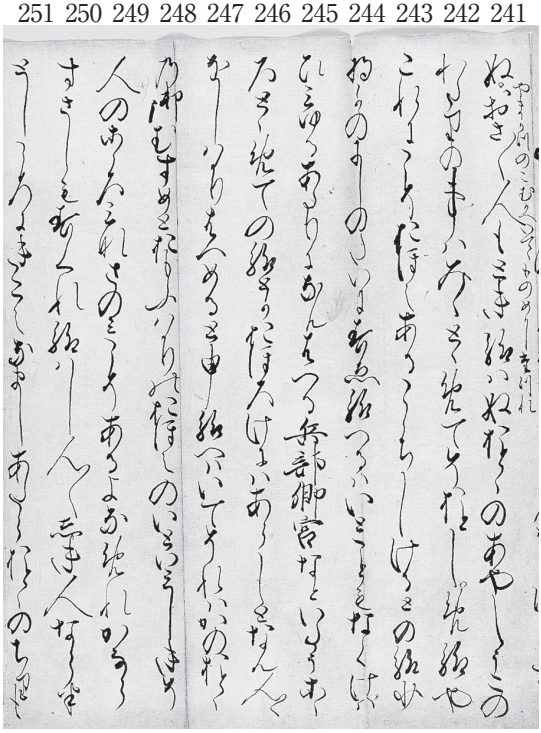
231 はしけくともさはらしかしとおほしよるもいと
232 けしからぬ御こゝろなりいよ〳〵こゝろやすからす
233 おもひわたらんもくるしからんなのめにおもひ
234 すくさんことのとさまかうさまにかたきそよつか
235 すむつかしき御かたらひなりけるうちのおほ
236 いとのはこのいまの御むすめの事をうちの人もゆる
237 さすかるめいひよにもそしりいふとき、給に
238 少将ことのついてにおほきおとゝのさる事やとゝひ
239 給し事かたりきこえけれはわらひ給てさか
240 しかしこにこそはとしころをとにもきこえ

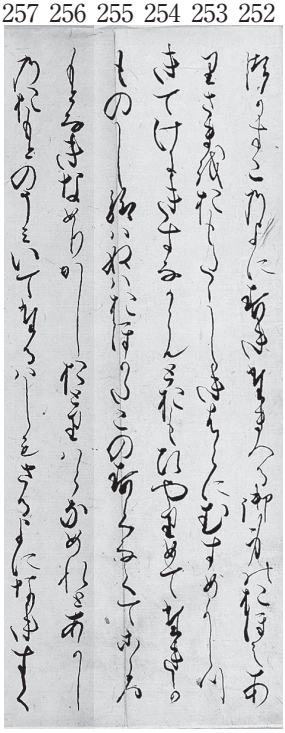


241 ぬ。おさ〳〵人もとき給はぬおとゝのあやしうこの（やまかのこむかいてゝものめかしたうれ）
242 わたりの事はみゝとゝめてそおとしめ給や
243 これにこそおほえあるこゝちしけるとの給少
244 将かのにしのたいにすゑ給へるはいとこともなくけは
245 ひみゆるあたりになんはへる兵部卿宮なといたうこゝ
246 ろとゝめての給とかおほろけにはあらしとなん人〳〵
247 をしはかりはへめると申給へはいてそれはかのおとゝ
248 の御むすめとおもふはかりのおほえのいといみしきそ
249 人のこゝろみなさのみこそあるよなめれかなら
250 すさしもすくれ給はし人〳〵しき人ならは
251 としころにきこえなましあたらおとゝのちりも

」第十二紙

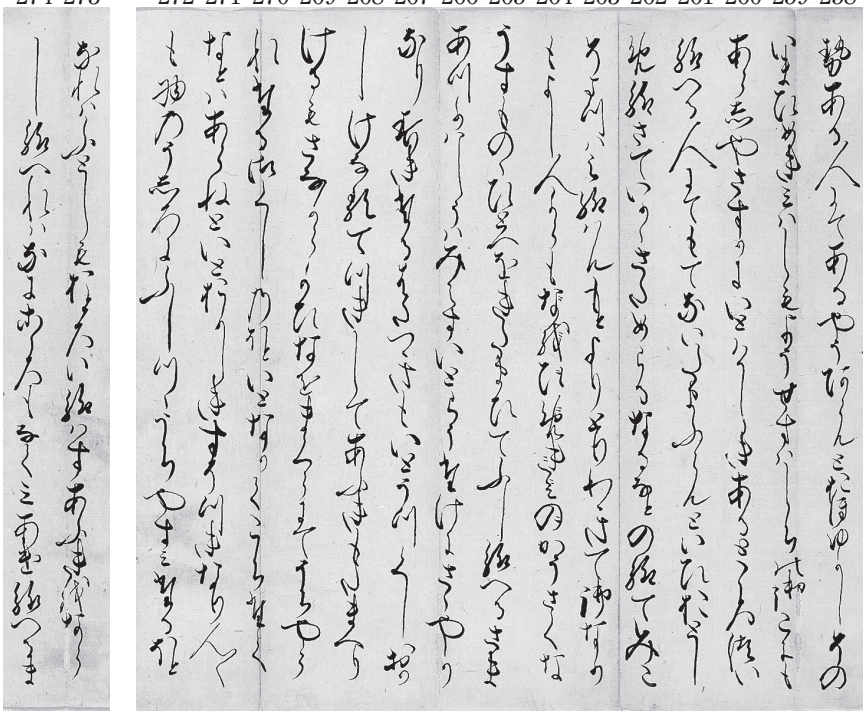
252 つかすこのよにすきたまへる御身のおほえあ
253 りさまをおもたゝしきはらにむすめかしつ
254 きてけにきすなからんとおもひやりめてたきか
255 ものし給はぬはおほかたこのすくなくてこゝろ
256 もとなきなめりかしおとりはらなめれとあかし
257 のおもとのうみいてたるはしもさるよになきすく





258 せある人にてあるやうあらんとおほゆかしその
259 いまひめきみはしもようせすはしちの御こにも
260 あらしやさすかにいとけしきあるところつい
261 給へる人にてもてないたまふらんといひおとし
262 め給さていかゝさためらるなるなとの給てみこ
263 そまつはえ給はんもとよりとりわきて御なか
264 もよし人からもなをひめきみのかうさくな
265 うすものゝひとへをきたまひてふし給へるさま
266 あつかはしうはみえすいとらうたけにさゝやか
267 なりすきたるはたつきもいとうつくしおか
268 しけなるてつきしてあふきもたまへり
269 けるもさなからかひなをまくらにてうちやら
270 れたる御くしのほといとなかくこちたく
271 なとはあらねといとおかしきすそつきなり人〳〵
272 も物のうしろにふしつゝうちやすみたるほと
273 なれはふとしもおとろい給はすあふきをなら
274 し給へれはなにこゝろもなくみあけ給へるま

」第十三紙



275 みもらうありけたかきさまはしらすいとらう
276 るあはひならんかしとの給てもなをひめきみの
277 御ことあかすくちをしくかやうにこゝろにくゝ
278 もてなしていかにしなさんとやすからすいふ
279 かしからせまし物をとねたけれはくらゐさはか
280 りとみさらんかきりはなをゆるしかたくおほさるゝ
281 なりけりおとゝもねんころにくちいれかへさひ給
282 はこそはまくるやうにてなひかめとおほすをおと
283 こかたはたさらにいられ給はすこゝろやましく
284 なんとかくおほしめくらすまゝにかるらかにゆく
285 りもなくはひわたり給へり少将も御ともにまい
286 りたまふひめきみひるねし給へるほとなりけり
287 たけにてつらつきのあかめるもおやの御めに
288 はいとうつくしうみゆうたゝねはいさめきこゆる
289 ものをなゝとかいと物はかなきさまにてはおほとの
290 こもりたりける人くもちかうさふらはていとあや
291 しやをんなはつねにみをこゝろつかひしてなん
292 あるへきこゝろやすくうちすてたるさまにもて

293 なしたるはしなゝきわさなりさりとていとさか

」第十四紙

294 しうみかためてふとうそんのたらによみいんつ
295 くりてゐたらんもにくしうつゝの人にもあま
296 りけとをくものへたてかましきなとけたかきやう
297 とても人にくゝ心うつくしうはあらぬわさなり
298 おほきおとゝのきさきかねのひめきみならはし
299 たまふなるをしへはよろつの事にかよはしな
300 たらめてこと〳〵しきゆへもつけしたと〳〵し
301 き事もあらしとぬるらかにこそをきて給
302 ぬれけにさもあることなれと人としてこゝろにも
303 するわさにもたてゝなひくかたはかたとありける
304 ことなりけれはおひいて給さまありなんかしか
305 のきみの人となりおほやけみやつかへにいたし
306 たて給はんよのけしきこそいとゆかしけれ
307 なとの給ておもふやうにてみたてまつらんと人し
308 れすおもひしすちはかたくなりにたれといかて
309 人わらはれならすしなしたてまつらんとなん人の

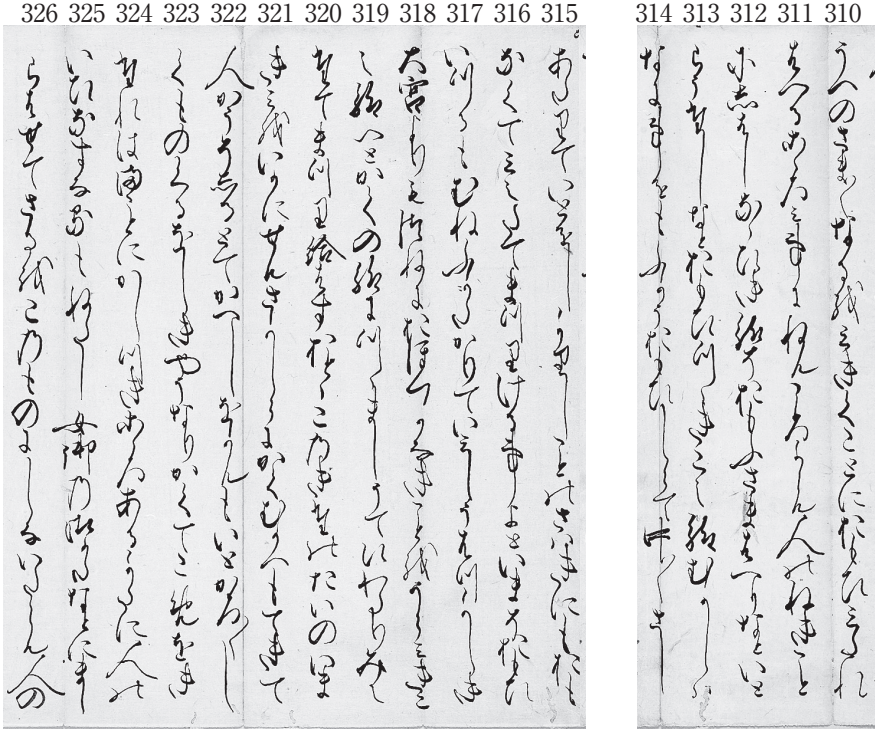
293 なしたるはしなゝきわさなりさりとていとさか

294 しうみかためてふとうそんのたらによみいんつ
295 くりてゐたらんもにくしうつゝの人にもあま
296 りけとをくものへたてかましきなとけたかきやう
297 とても人にくゝ心うつくしうはあらぬわさなり
298 おほきおとゝのきさきかねのひめきみならはし
299 たまふなるをしへはよろつの事にかよはしな
300 たらめてこと〳〵しきゆへもつけしたと〳〵し
301 き事もあらしとぬるらかにこそをきて給
302 ぬれけにさもあることなれと人としてこゝろにも
303 するわさにもたてゝなひくかたはかたとありける
304 ことなりけれはおひいて給さまありなんかしか
305 のきみの人となりおほやけみやつかへにいたし
306 たて給はんよのけしきこそいとゆかしけれ
307 なとの給ておもふやうにてみたてまつらんと人し
308 れすおもひしすちはかたくなりにたれといかて
309 人わらはれならすしなしたてまつらんとなん人の

310 うへのさま〳〵なるをみきくことにおもひみたれ
311 はへるこゝろみ事にねんころからん人のねきこと
312 にしはしなゝひき給そおもふさまはへりなといと
313 らうたしなとおもひつゝきこえ給むかしは
314 なに事をもふかうおもひしらて中〳〵さし

」第十五紙

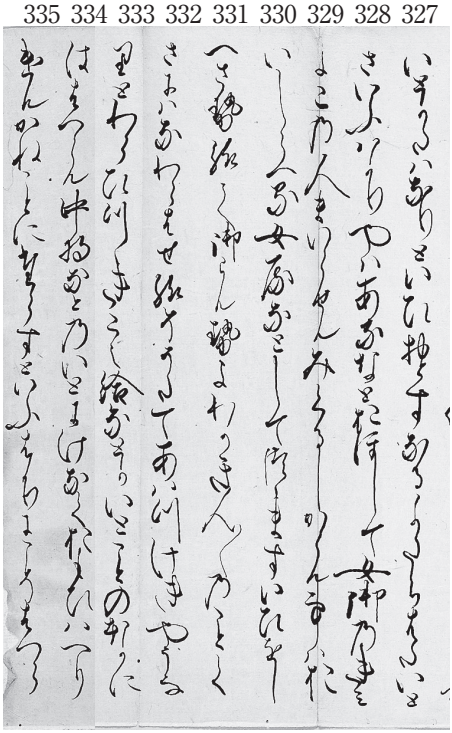
315 あたりていとをしかりしことのさはきにもおも
316 なくてみえたてまつりける事よといまそおもひ
317 いつるもむねふかたかりていみしうはつかしき
318 大宮よりもつねにおほつかなきことをうらみきこ
319 え給へとかくの給につゝましうてえわたりみえ
320 たてまつり給はすおとゝこのきたのたいのいま
321 きみをいかにせんさかしらにかくむかへもてきて
322 人かうそしるとてかへしをかんもいとかる〳〵し
323 くものくるをしきやうなりかくてこめをき
324 たれはまことにかしつきこゝろあるかたに人の
325 いひなすなるもねたし女御の御かたなとにまし
326 らはせてさるをこのものにしないたらん人の

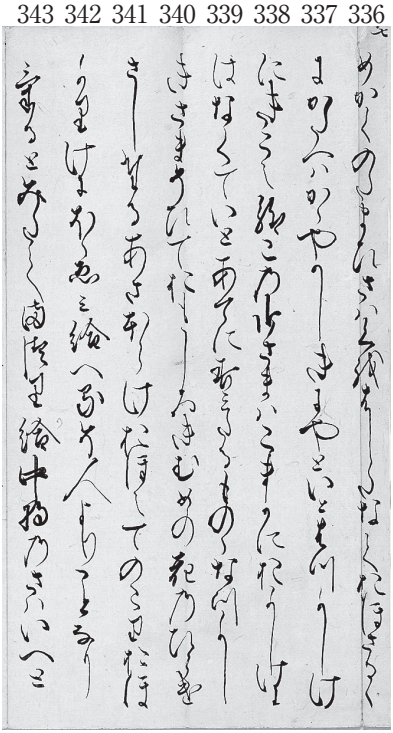


327 いとかたはなりといひおとすなるかたちはたいと
328 さいふはかりやはあるなとおほして女御のきみ
329 にこの人まいらせんみくるしからん事はお
330 いしらへる女房なとしてつゝますいひをし
331 へさせ給て御らんせよわかき人〳〵のことく
332 さにはなわらはせ給そうたてあはつけきやうな
333 りとわらひつゝきこえ給なとかいとことのほかに
334 ははへらん中将なとのいとにけなくおもひはへり
335 けんかねことにたらすといふはかりにこそはへら

」第十六紙

336 めかくのたまひさはくをはしたなくおほさるゝ
337 にかたへはかゝやかしきにやといとはつかしけ
338 にきこえ給この御さまはこまかにおかしけに
339 はなくていとあてにすみたるものゝなつかし
340 きさまそひておもしろきむめの花のひらけ
341 さしたるあさほらけおほえてのこりおほ
342 かりけにほゝゑみ給へるそ人よりことなり
343 けるとみたてまつり給中将のさはいへと

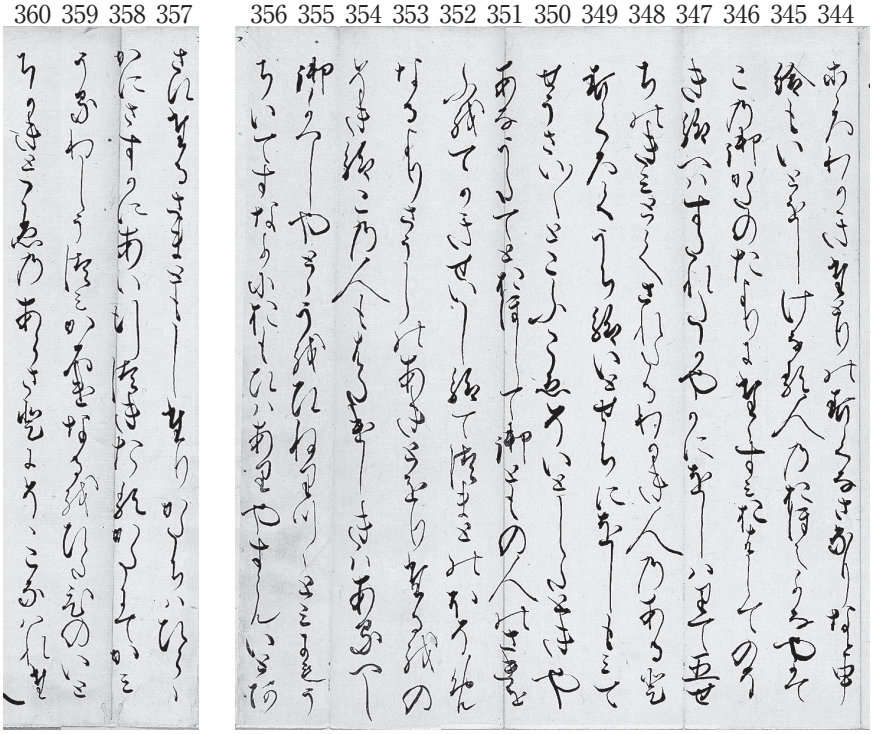




344 こゝろわかきたとりのすくなさなりなと申
345 給もいとをしけなる人のおほえかなやかて
346 この御かたのたよりにたゝすみおはしてのそ
347 き給へはすたれたかやかにをしはりて五せ
348 ちのきみとてされたるわかき人のあると
349 すくろくうち給いとせちにをしもみて
350 せうさい〳〵とこふこゑそいとしたときや
351 あなうたてとおほして御ともの人のさきを
352 ふをてかきせいし給てつまとのほそめ
353 なるよりさうしのあきとをりたるをの
354 そき給この人もはたけしきはあるへし
355 御かへしやとゝうをひねりつゝとみにもう
356 ちいてすなかにおもひはありやすらんいとあ

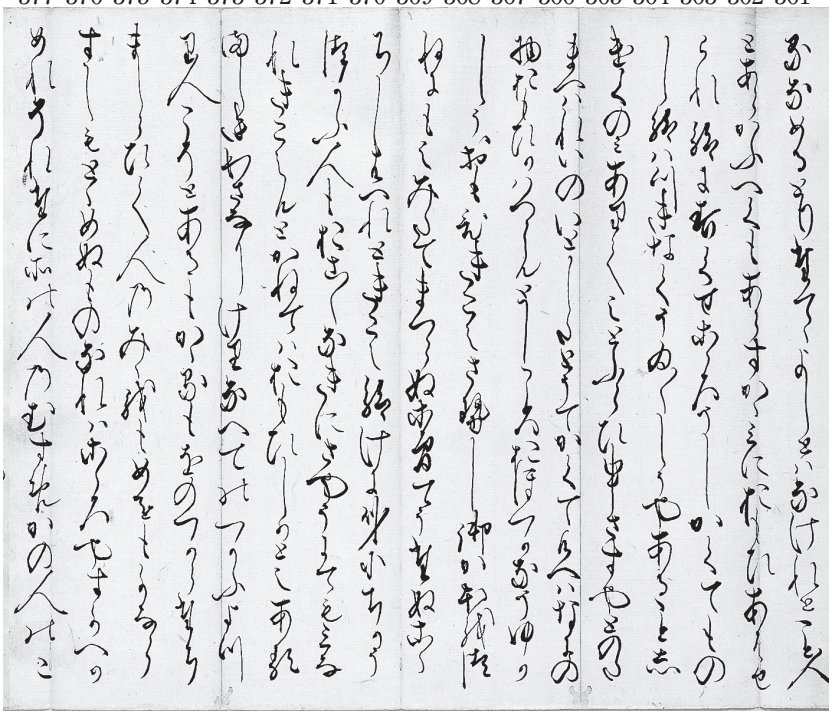
」第十七紙

357 さえたるさまともしたりかたちはひらゝ
358 かにさすかにあい行つきたるかたにてかみ
359 うるわしうつみかろけなるをひたひのいと
360 ちかきとこゑのあらさとにそゝこなはれた

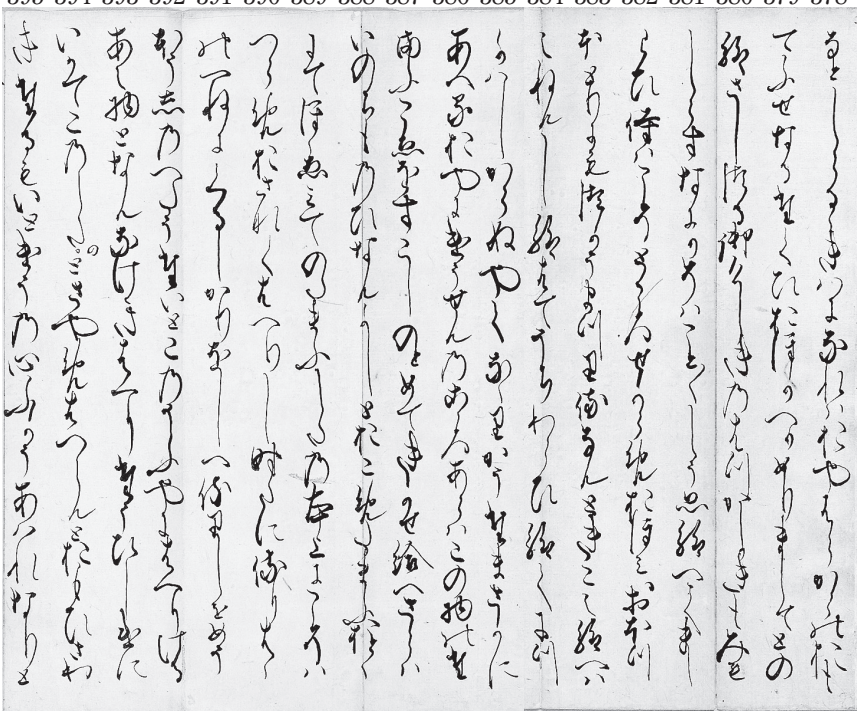


361 るなめるとりたてゝよしとはなけれとこと人
362 とあらかふへくもあらすかゝみにおもひあはせ
363 られ給にすくせこゝろうしかくてもの
364 し給はつきなくうゐ〳〵しうやあることし
365 けくのみありてえとふらひ申さすやとのた
366 まへはれいのいとしたとうてかくて候へはなにの
367 物おもひかはへらんとしころおほつかなうゆか
368 しうおもひきこえさせし御かほをつ
369 ねにもえみたてまつらぬこそてうたぬこゝ
370 ちしはへれときこえ給けに身にちかう
371 つかふ人もおさ〳〵なきにさやうにてもみな
372 れきこえんとかねてはおもひしかとえある
373 ましきわさなりけりなへてのつかふまつ
374 り人こそとあるもかゝるものつからたち
375 ましらひて人のみゝをもめをもかなら
376 すしもとゝめぬものなれはこゝろやすかへか
377 めれそれたにその人のむすめかの人のこ

」第十八紙



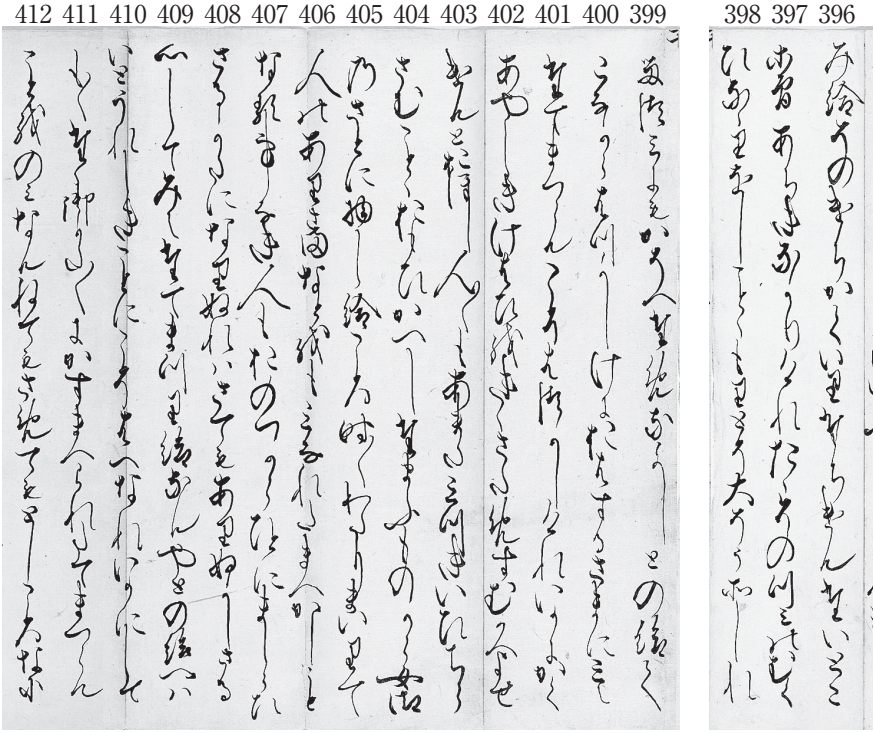
378 なとしらるゝきはになれはおやはらからのおも
379 てふせなるたくひおほかへかめりましてとの
380 給さしつる御けしきのはつかしきもみも
381 しらすなにかそはこと〳〵しう思給へてまし
382 らひ侍はこそところせからめおほみおほつ
383 ほとりにもつかうまつり侍なんときこえ給へは
384 えねんし給はてうちわらひ給てにつ
385 かはしからぬやくなゝりかうたまさかに
386 あへるおやにけうせんのこゝろあらはこの物のた
387 まふこゑをすこしのとめてきかせ給へさらは
388 いのちものひなんかしとおこめたまふおとゝ
389 にてほゝゑみてのたまふしたの本上にこそは
390 へらめおさなくはへりし時たに侍りはゝ
391 のつねにくるしかりをしへ侍りしをめう
392 ほうしのへたうたいとこのうふやにはへりける
393 あえ物となんなけきはへりたうひしけに
394 いかてこのした。とさやめはへらんとおもひさわ
395 きたるもいとけうの心ふかうあはれなりと



396 み給そのけちかくいりたちけんたいとこ
397 こそあちきなかりけれたゝそのつみのむく
398 ひなゝりをしことゝもりとそ大そうそしれ

」第十九紙

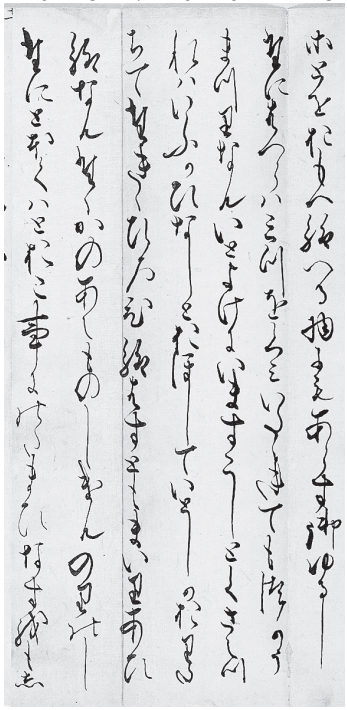
399 るつみにもかそへためるかしとの給て
400 こなからはつかしけにおはするさまにみえ
401 たてまつらんこそはつかしけれいかにかく
402 あやしきけはひをきゝさためすむかへよせ
403 けんとおほし人〳〵もあまたみつきいひちら
404 さむこと、おもひかへしたまふものから女御
405 のさとに物し給ころ時〳〵わたりまいりて
406 人のありさまなとをもみなれたまへかしこと
407 なる事なき人もおのつからひとにましらひ
408 さるかたになりぬれはさてもありぬかしさる
409 心してみえたてまつり給なんやとの給へは
410 いとうれしきことにこそはへなれいかにして
411 も〳〵たゝ御かた〳〵にかすまへられたてまつらん
412 ことをのみなんねてもさめてもとしころなに

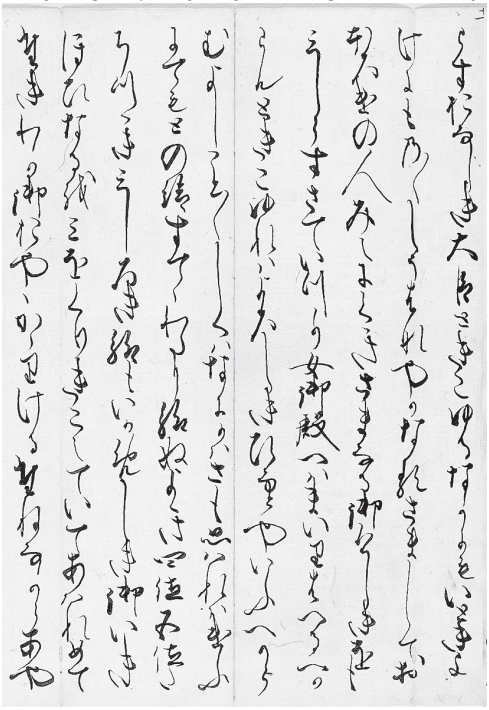


413 ことをおもへ給へる物にもあらす御ゆるし
414 たにはへらはみつをくみいたゝきてもつかう
415 まつりなんいとよけにいますこしとくさえつ
416 れはいふかひなしとおほしていとしかおりた
417 ちてたきゝひろひ給はすともまいりあひ
418 給なんたゝかのあえものしけんのりのし
419 たにとほくはとおこ事にのたまひなすをもし

」第二十紙

420 らすおなしき大臣ときこゆるなかにもいときよ
421 けにものくしうはなやかなるさましてお
422 ほろけの人みえにくきさまなる御けしきをも
423 みしらすさていつか女御殿へはまいりはへるへか
424 らんときこゆれはよろしきひなとやいふへから
425 むよしことくしくはなにかはさも思はれはけふ
426 にてもとの給すてゝわたり給ぬよき四位五位た
427 ちつゝきみしろき給もいかめしき御いき
428 ほひなるをみをくりきこえていてあはれめて
429 たきわか御おやゝかゝりけるたねなからあや





430 しきこいへにおひいてけること、の給五せち
431 あまりこと〳〵しうはつかしけにそおはすめ
432 るよろしきほとなるおやのおもひかしつかんに
433 そたつねいてられ給はましといふもわりなし
434 れいのきみの人のいふ事いひやふり給らん
435 いてあなめさましいまはひとつくちにないは
436 れそあるやうあるへきみにこそあめれとて
437 はらたち給かほつきけちかうあひきやう
438 つきうちとけそほれたるはさるかたにてもお
439 かしうつみゆるされたりたゝいとあやしきし
440 も人のひなひたる物のなかにておひてたまへ

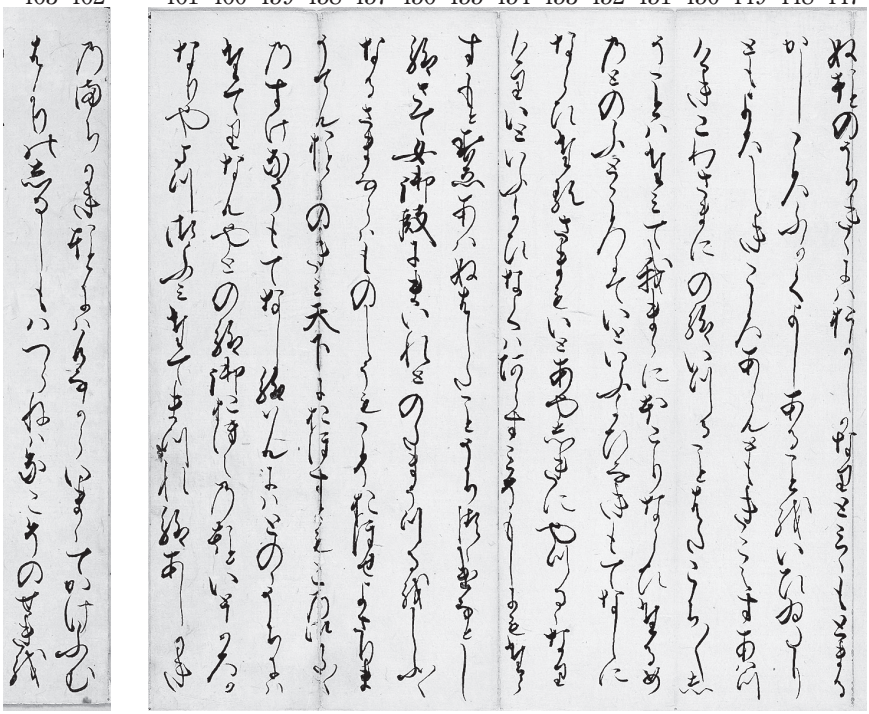
」第二十一紙

441 れはものいふさまもしらすことなるゆへなきこ
442 とのはをもこゑのとやかにをしゝつめていひ
443 いたしたるはうちきくみゝにもおもりかにお
444 ほえおかしからぬうたかたりをするもこはつかひ
445 つき〳〵しくてのこり思はせもとすゑおしみ
446 たるさまにうちすしたるはふかきすち思ひえ

447 ぬほとのうちきゝにはおかしかなりとみゝもとまる
448 かしこゝろふかくよしあることをいひゐたり
449 ともよろしきこゝろあらんともきこえすあはつ
450 けきこわさまにの給いつることはたこちくしし
451 うことはたみて我まゝにほこりならひたるめ
452 のとのふところにていといふかひなきもてなしに
453 ならひたるさまもいとあやしきにやつるゝなり
454 けりといふかひなくはあらすみそもしにもたら
455 すもとすゑあはぬはしたことうちつゝけなとし
456 給さて女御殿にまいれとのたまうつるをしふく
457 なるさまならはものしうもこそおほせよさりま
458 うてんおとゝのきみ天下におほすともこの御かたく
459 のすけなうもてなし給はんにはとのゝうちには
460 たてりなんやとの給御おほえのほといとかろか
461 なりやまつ御ふみたてまつれ給あしかき

」第二十二紙

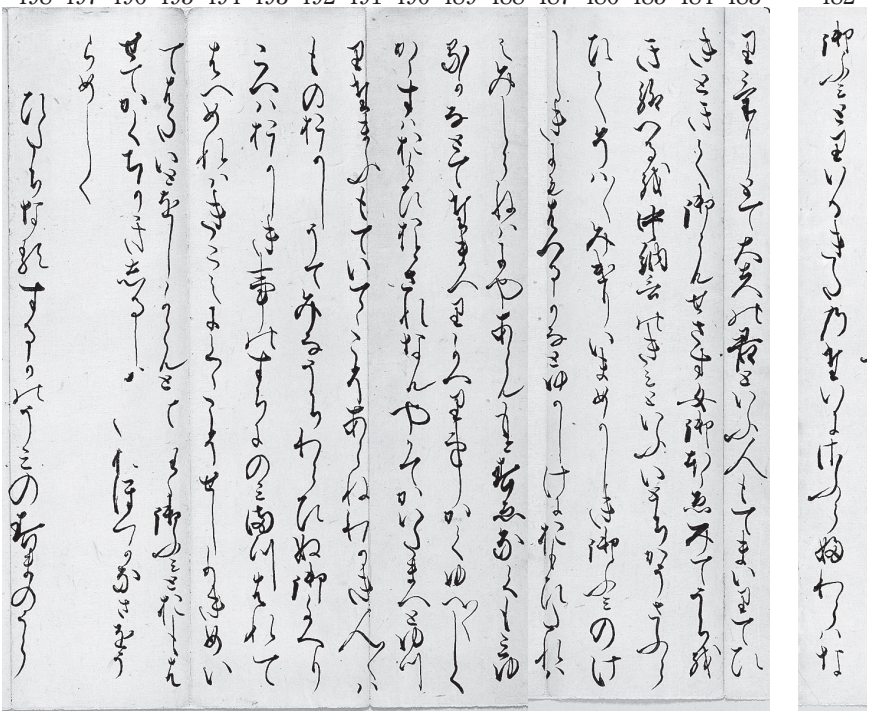
462 のまちかきほとには候なからいまゝてかけふむ
463 はかりのしるしもはへらねはなこそのせきを



464 やすゑさせ給つらんとなんしらねともむさし
465 のといへはかしこけれとあなかしこ〳〵やとてん
466 かちにてうらにはまことやくれにもまいりこむ
467 と思給へたつはいとふにはゆるにやはへらんいてや〳〵
468 あやしきはみなせかはにをとて又はしにはさて
469 かくそ

470 くさわかみひたちのうみのいかゝさきいかて
471 あひみんたこのうらなみおほかはみつのとあ
472 をきしきしひとかさねにいとさうかちにいかれる
473 てのそのすちともみえすたゝよひたるかきさ
474 ましもしなかにわりなうよしはみたりくた
475 りのほとはしさまにすちかひてたうれぬへ
476 くみゆるをうちゑみつゝみてさすかにいとほ
477 そくちひさくまきなしてむすひてなて
478 しこのはなにつけてひすましわらはしも
479 いとよなれてきよけなるいまゝいりなりけり女
480 御殿の御方のたいはんところによりてこれ
481 まいらせさせ給へといふしもつかへみしりて

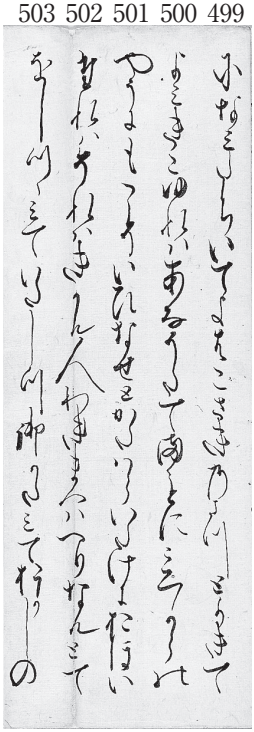
482 御ふみとりいるきたのたいにさふらふわらはな
」第二十三紙
483 りけりとて大夫の君といふ人もてまいりてひ
484 きときて御らんせさす女御ほゝゑみてうちを
485 き給へるを中納言のきみといふいとちかうさふら
486 ひてそは〳〵みけりいまめかしき御ふみのけ
487 しきにもはへるかなとゆかしけにおもひたれは
488 えみしらねはにやあらんもとすゑなくもみゆ
489 るかなとてたまへりかへり事かくゆへ〳〵しく
490 かゝすはおもひおとされなんやかてかいたまへとゆつ
491 りたまふもていてゝこそあらねわかき人〳〵は
492 ものおかしうてみなうちわらひぬ御かへり
493 こへはおかしき事のすちにのみまつはれて
494 はへめれはきこえにくゝこそせしかきめい
495 てはたいとをしからんと□□ゝ御ふみとおもは
496 せてかくちかきしるし□□おほつかなさをう
497 らめしく
498 ひたちなるするかのうみのすまのうら

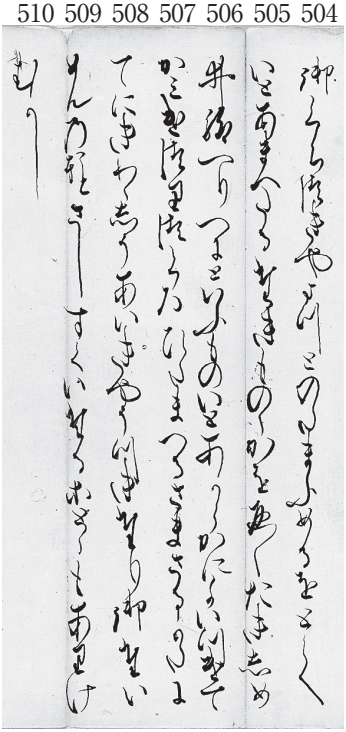


499 になみたちいてよはこさきのまつとかきて
500 よみきこゆれはあなうたてまことにみつからの
501 やうにもこそいひなせとかたはらいたけにおほい
502 たれはそれはきかん人わきまへはへりなんとて
503 をしつゝみていたしつ御かたみておかしの

」第二十四紙

504 御くちつきやまつとのたまふめるをとて
505 いとあまへたるたきものゝかを返〳〵たきしめ
506 ゐ給へりへにといふものいとあからかにかいつけて
507 かみけつりつくろひたまへるさまさるかたに
508 てにきわゝしうあいきやうつきたり御たい
509 めんのほとさしすくいたること、もありけ
510 むかし





【書写奥書】

右二条為家卿真蹟源氏常夏巻一帖

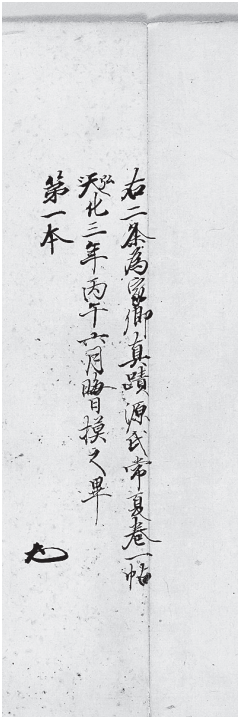
末化三年丙午六月晦日模之畢

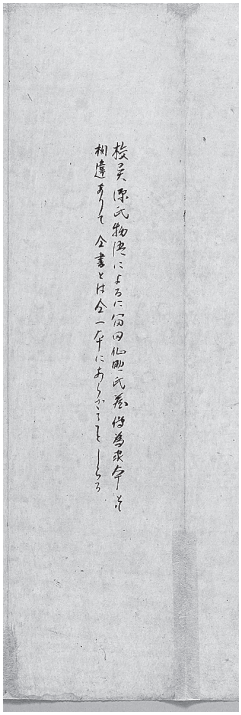
第一本　（花押）　」第二十五紙

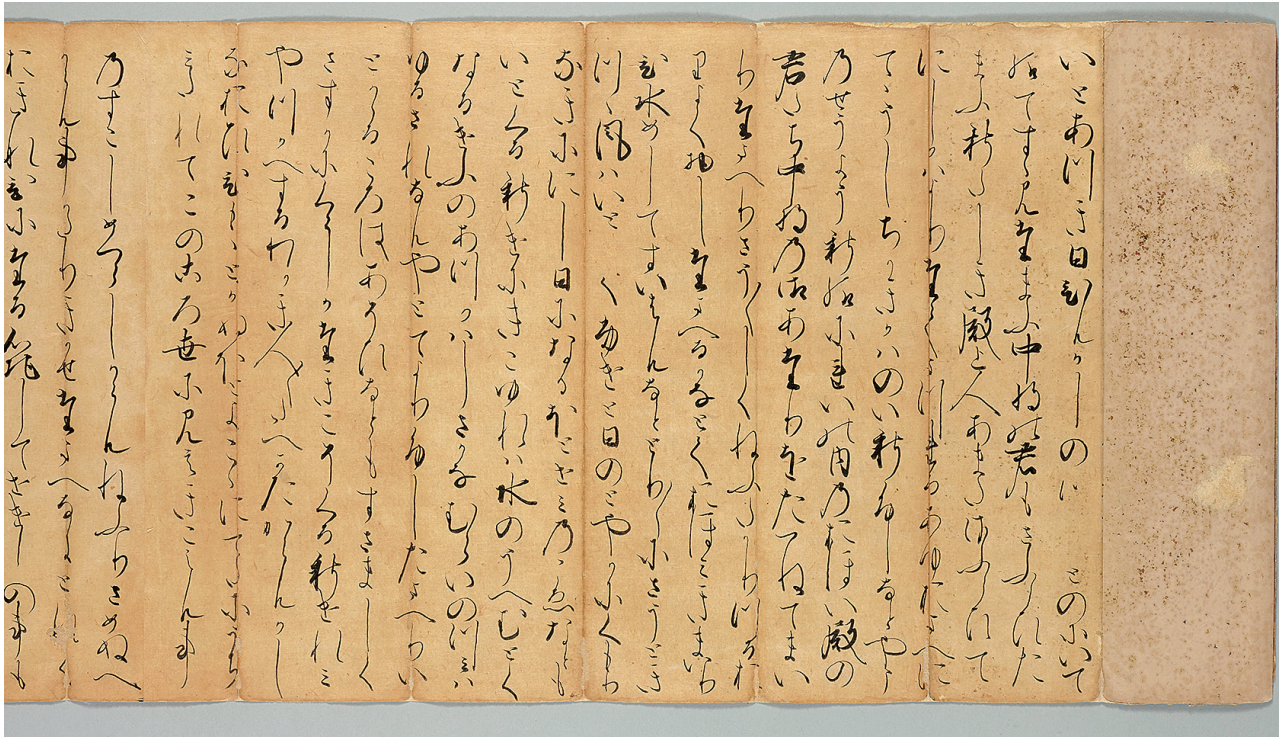
【裏書】

校異源氏物語によるに冨田仙助氏蔵伝為家本とも相違ありて同書とは同一本にあらざることしらる

【裏紙表】







調査報告 113：為家筆模写本